

# 国文学と人類学

中 沢 新 一

## 国文学の本質はなにか

今日は、二松学舎大学の人文学会に呼んでいただいて、どんなお話をしたらいいのかと考えたのですが、自分が専門としている学問領域と国文学が、どういうふうに関係するのかなについて、話すのがよいだろうと思いました。

私が学生時代から大きな影響を受けてきた国文学者に、折口信夫という方がいます。日本民俗学の創始者のひとりでもあります。その研究には深い関心をもちつづけてきました。折口信夫は、この日本列島に暮らすのは、さまざまな場所から渡来して、多様なDNAや言語をもって文化を築いてきた人々であり、このような日本人が作り上げてきた文学を理解するためには、国内の研究だけでは不十分であって、地理的には遠く離れていても、歴史のあるいは民族に関係をもつであろう人々が伝えている文学とのつながりのなかで理解しなければいけないということを考えて、独自の研究を

展開した方でした。

ですから、まさに折口信夫のなかでは、国文学と人類学の結合が実現されていたわけです。「国文学とはなにか」あるいは「日本語で表現された文学の本質とはなにか」という問題について、私は折口さんの研究からたくさんのことを学び取ってきましたけれども、その研究は国文学のなかでまだ十分に生かされているとは言えないように思います。

「国文学と人類学」という主題は、まだまだこれから開拓していくべき側面がたくさんあって、そのなかには折口信夫が直感的には理解していたけれども時間的・時代的な制限があって十分に展開できなかった主題、あるいは彼が独特の感覚で詩的に表現するだけにとどめておいた重要な主題、こういうものがたくさん残されているわけです。これらの主題を拡大していくと、国文学のまだ実現されていない領域が見えてくる。と同時に、この学問が二十一世紀においても大きな可能性をもった学問であるということが見えてくるような気がします。

そこで今日は、折口信夫の視点を借りつつ、人類学の主題との交錯点を探ることによって、「国文学の本質はなにか」ということについてお話できればと思います。

### 折口信夫の卓見

まず、人類学とはどういう学問かについて、私なりの考えをお話しますと、いまの私たちと同じ能力をもち、心の構造をもった現生人類が誕生して、すでに十万年近い月日が流れています。旧石器時代と呼ばれる時代には、狩猟採集を中心に、基本的には定住しない生活が十万年近く続きました。彼らは高度な文化を発達させていましたが、南ヨーロッパの洞窟には、壁画としてその跡が残されています。また昨年のことですが、アフリカ、ボツワナの洞窟のなかで、七万年くらい前と推定される巨大な蛇をかたどった石像と祭祀跡が発見されました。今日は、この蛇たちの話が中心となってきます。

八、九千年前、あるいは一万三、四千年くらい前まで遡ることが可能だと思えますけれども、人類の文化の組み替えがおこなわれ、新石器と呼ばれる時代になりました。そしてこの新石器文化はいったん生まれるや、またたくまに地球上に広がっていきました。日本列島にも新石器型の文化をもった人々がたどり着き、縄文と呼ばれる文化をつくり上げました。

エジプトからメソポタミア、小アジアにかけての地帯におこった新石器型の文化のなかから、大規模な都市を形成し、灌漑を行い、野生動物の家畜化を組織的におこなう文明が発達していきました。これが今日の文明の原型です。私たちがいま生きているコンピュータと資本主義と高速度の交通機関による文明の基本的な形は、八、九千年前につくられた新石器文明の直接の子孫です。私たちはたとえば新しいコンピュータが発売されるたびに、人類史の新しい位相に達したような宣伝文句を目にしますが、じつはなにも本質的に新しいことははじまっていません。八、九千年前に形成された文明と今日のコンピュータを用いる文明は基本的に同じ型に属しています。

新石器型の文化には、ふたつのタイプがあることがわかります。それは都市や国家を形成しない文化と、形成する文化です。日本列島に住み着き、縄文文化を形成した人々の文化は前者です。ここでは農業や動物の家畜化がはじまり、社会構造が複雑化して宗教の形も新石器型に変わっていますが、国家というものは形成されません。もうひとつのタイプは、西アジアに発達した都市型の文化です。やがて中国にも同じ型の文化をつくり出して、東アジア全域に大きな影響力をおよぼすようになっていきました。

それで「人類学とはなにか」というと、「新石器型の文明の特徴とそれがつくり出す世界観、人間がつくり上げる世界を研究する学問」と言うことができますと思います。なぜ旧石器型の文化を対象にしなかったかと言うと、十九世紀に人類学という学問がはじまったときにはすでに、旧石器型の文化そのものは、この地球上には存在していなかったからです。人類学は、最初にヨーロッパやアメリカではじまりましたが、研究対象は、さきほど言いました新石器型のふたつのタイプ

のうち、都市を形成しない文化をまだ持続している人々の文化だと言うことができます。日本の縄文時代の研究も、まさにそうした研究になるわけですが、興味深いことに、日本列島に展開した文化は、中国南部に生活していた少数民族や台湾、フィリピン、ベトナムやインドネシア、そしてニューギニアなど南の島の先住民の人々の思考様式と深いつながりをもっています。

日本列島に住みついた人々の新石器文化、いわゆる縄文文化の特徴として、もうひとつ、生者たちが形成している世界とは異質な死者の世界をヴィヴィッドな実感をもって理解している点を挙げられると思います。人間たちの社会の外部から、死者たちの世界、死者の感覚が入ってくる、そういう機会を頻繁につくっている文化です。精霊と呼ばれる小さな神様がたくさん存在していて、生きている人間の世界と、人間の世界の外にある世界とを通路を使って行ったり来たりしています。つまりたくさんさんの穴があいている世界で、人間の世界から外に向かって、通路がいたるところにうがたれている。ところが新石器文化の発達とともに、しだいにこの穴が減ってきました。そして精霊たちにかわって、大きな神という概念が組織されるようになり、神様がいる特別な場所として神殿や神社がつくられ、その場所をとおしてしか他界との接点をもたない、そういう構造に変わっていきました。

人間の世界の外にある力を、いかにして人間の世界のなかへもってくるか。これが文芸様式を決定しているという考え方を最初にいただいたのが、折口信夫でした。折口信夫は、当時開拓されていた人類学の新しい研究を旺盛に吸収して、新石器型の文化に属する人々がどのような形で文学行為をおこない、宗教というもの、神の観念を形成していったのかという点について思索を深めました。

人類学の知見が、国文学の理解に新しい光を当てはじめたわけです。そこから折口信夫は、私たちのこの日本語による文学が、どういう契機で、どのような回路で、どのような様式ではじまったのかということにたいして、大胆な仮説を立

ではじめました。それは日本文学が出發、誕生したそもそもの原点である新石器型の文化の人々が、人間の世界の外に通路を開く、その通路の開き方の様式、それがまさに文学と呼ばれる様式をつくったのだということを見出したのです。それはいま読んでも天才的な仮説ですが、その仮説には深い根柢があり、今日はそれを具体的に説明していこうと思います。

### 「まれば」と文学の発生

文学という行為は、法律や社会的な掟にかかわる思考や表現の形態とはあきらかにちがいます。法律も言葉で表現される点では、文学と同じです。法律というのは、人間の社会を律している掟を、不文律の習慣を潜在的にかかえ込みながらも、最終的には言葉で表現して、人間の世界に起こることを判断していくためのものです。しかし法律の言葉、あるいは権力、社会的な習慣をつくり上げていっている言葉と、文学の言葉はいったどこがちがうのでしょうか。

折口信夫はこう考えていました。人間の言語、とりわけ母国語や共同体の言語は、共同体のなかに閉じています。日本語なら日本語、韓国語なら韓国語という言語共同体は、内側に向かって閉じていて、その外にある言語世界は異邦人の言語の世界というふうになっていきます。人々のあいだでまちはが理解され、社会的に正しいことや良識を支えている言葉があることによって、人々は共同体のなかで意志疎通ができますが、それは共同体の神によって支えられています。

日本列島に住んだ人たちは、これを神社の神として表現するようになりました。沖繩から東北まで日本列島におこわれた考え方は、基本的にはどれも類似していて、本土の神社にしても沖繩の御獄うたきにしても、そこにいる神は、姿かたちがありませんし、ことによると名前もないことがあります。しかし、その神はいつもそこにおいて、その神がいることによって人間同士が言葉を使ってコミュニケーションができるようになるという考え方がありません。

共同体の神様によって、言語の共同体は支えられています。しかし、その言葉の世界のなかでは文学は発生できないと

というのが、折口信夫の考え方です。文学という行為はなにかというと、言語共同体の外から異質な力や表現法をもった何者かが共同体のなかに踏み込んできて、安定していた共同体の表現や生活、心のもちようを大きく動揺させ変化させ、私たちの世界についての感覚までも根底からつくり替えていくような別のタイプの神や精霊が、文学には関与しなければいけない、というのが折口信夫の考え方でした。

つまり、文学が発生するためには、共同体の外が必要になってきます。そして、共同体が成り立つために排除されたいろいろな力を外側から運び込んでくる存在がいなければならぬ。これを折口信夫は「まれびと」と呼びました。「まれびと」というのは、「たまにやってくるお客様」という意味です。共同体には属しておらず、別の言葉をしゃべり、別の踊りを踊り、別の歌を歌い、別の社会制度をもった人々を、共同体が饗宴を開いて迎え入れる。「まれびと」を迎える饗応の行為からしか文学は発生できないと考えていた。これは一九二〇年代の発想としては天才的な発想であったと思います。当時の多くの国文学者やあるいは柳田國男先生のような民俗学者であっても、日本人の神、あるいは芸術表現というものは、単一の言語的共同体の内部から発生すると考えていました。ところが折口さんは、つねに外というものを考えなければいけないと考えた。

さらに言えば、法律の言葉と文学の言葉は根本的にちがいます。法律の言葉は社会共同体をつくっている人々のなかに均質な理解の回路をつくります。そのために多くの要素を排除します。不要なもの、使ってはいけないものとして外側に排除する。ところがそこからは文学は生まれません。共同体に属していない異質な力を共同体のなかにもち込んでくる回路の様式こそが文学を形成すると折口さんは考えました。

この日本列島に文化を築いてきた人々は、南は沖縄から北は東北まで「まれびと」の考え方をもっていました。一年のうちのある時期、おもにお盆とお正月になると、自分たちの世界の外にいる人々、そのもつとも極端な存在は死者ですが、

死者を自分たちの世界に招き入れるお祭りをおこなっていました。これはおそらくは縄文時代からの風習であろうと思います。私たちの世界は、日頃は共同体の内側へ閉じこもって、均質な共同体のなかでコミュニケーションをおこなっていますが、盆暮の期間には、共同体が外側に向かって通路を開いて、その通路をとおって外の世界からおびただしい外部の力が入ってくる様式をつくり上げました。さきほど言いましたように、もっとも極端な形は死者たちで、死者と生活を共にする期間が設けてありました。そしてそのとき、外の世界からの客人を招き入れるさまざまな風習が発達し、饗宴の形式が生まれ、歌が生まれ、文芸の形態が生まれてくることになりました。

### 東歌に見る古代的な喩

文芸のおおもとの形は「まれびと」として考えることができる。つまり均質なシステムのなかに、外から異質な力を招き入れてくる宗教の様式として「まれびと」は発展したけれども、それを言語で表現すると文学、文芸になると折口さんは考えたわけですね。これが有名な折口さんの国文学の「まれびと」による起源説と呼ばれるものです。いろいろな側面から折口さんはこの問題を考えましたが、いちばん重要な問題は、文学が喩の構造としてつくられているとき、その喩の根本的な構造のなかに「まれびと」の構造が入っているということ、折口さんは知っていたということです。

人類がおこなった最古の文芸はなにか。十九世紀以来多くの人類学者によれば、最古の文芸形態は、「なぞなぞ」であったと言われています。なぞなぞというのは、日常生活のなかでは遠く離れたところにあるふたつの意味場が、音の類似性などによって一瞬にして結合することによって生まれますが、その結合の瞬間の驚きや喜びが文芸のおおもとになったと考えられています。このなぞなぞの形がやがて喩の体系をつくり、詩へ発展していったというのが、十九世紀の人類学が明らかにしてきたことです。

たとえば「メはあっても見えないもの、なに？」というなどなぞの答えは「じゃがいも」ですが、これはじゃがいもの芽と人体の目を重ね合わせています。この場合は、植物と人間の身体の器官が一瞬にして音の共通性でくっついていきます。この驚きは私たちに楽しみをもたらしますが、これが喩の構造になっていきます。

あらゆる民族の文学において、喩を用いた表現、詩というものが最初の文芸形態になります。詩の命は喩であると思いますが、この喩の構造は「まれびと」と同じ構造をしています。さきほどのなぞなどで言えば、現実の世界では離れたところにあるふたつの「メ」が重なり合う場所が生まれる。芽と目が重なり合うところに出てくるものはどういうものか、と言われても、私たちには表現不可能です。「じゃがいもの芽のような形をした目」というものを漫画で描くことはできませんが、通常はこれは理解不能なものです。しかし理解不能であっても、理解不能であるからこそ私たちは驚きと喜びを見いだします。ふたつの均質な意味場があり、じゃがいもの芽、つまり植物の領域として、まるで一本の金太郎飴のようにつづいている意味場をポキッと折ります。折れた部分は人体の目のほうにつながっていきませんが、そこに意味と無意味のちょうど境界状態にある不思議な新しい意味が登場してきます。

その新しい意味は、どこにも所属できません。人体の目から生えている芽、あるいはじゃがいものなかでキョロキョロとまわりを見渡している目かもしれないかもしれませんが、そういうものはこの世界には実在していません。しかし人間は思考力によってそれをつくることができません。それが比喩です。言語共同体のなかに所属できないものが出現したとき、私たちの心は喜びに輝きます。折口さんは、これが文芸の発生であり、「まれびと」の構造と同じだと考えました。

このような折口さんの考え方を、今日は少し具体的に見ていこうと思います。

伊香保<sup>イカホ</sup>の八尺<sup>やさか</sup>の堰<sup>キテ</sup>に立つ虹<sup>ヌジ</sup>の、あらはろ迄も、さねをさねてば



伊香保の山の八尺すなはち即、幾尺とも知れぬ高い用水壕の辺に立つてゐる、虹ニジではないが、あの様に、人の目に付いて現れる迄も、満足する程寝たならば、見つかつてもかまはない。

(折口信夫『口訳万葉集』)

これは折口さんが『万葉集』を口語訳した『口訳万葉集』のなかから選んだものです。東歌に属するものです。「伊香保ろ」ですから、群馬県のあたりでしょう。天空に向かって立ちのぼった虹をみんなが見ている。その虹と同じように、私たちの隠された恋も、人々の知るところとなってもかまうものか。思うさま愛し合って寝ることができるのなら、というエロチックな歌ですね。

口語訳の「虹ではないが」というところを見てください。これは折口さんの口語訳の特徴で、古代的な喩の構造を訳すときに、この身振りをとっています。まずは用水壕の上に立つ大きな虹のことを言い、しかし「虹ではないが」と折れ曲がりをつくり、次にあらわれてくるのは、隠された男女の性愛関係です。一方は自然の描写であり、一方は人間の世界の、とりわけ恋人同士の関係ですが、虹を蝶ちようつがい番にして、ふたつの意味場がつながれています。「虹ではないが」という表現が、蝶番のような働きをしているわけです。

この『口訳万葉集』を注意深く読んでみるとわかりますが、とりわけこの喩の構造、自然描写と人為に属することをつないで蝶番で折り曲げるといふ構造が、東歌のなかでは特徴的にあらわれてきます。同じ『万葉集』でも奈良の歌人、つまり都に住んでいた人々の歌を翻訳するときになりますと、この蝶番機能が弱まってくる様子が、折口さんの翻訳では如実にでてきます。

折口さんの考えではおそらく、喩の構造の原型的なものが東歌にあらわれていて、しかもそこでは喩というものが、ほとんど裸の状態で機能しています。ふたつの均質な状態の意味場がポキッと折られ、言語の世界に取り込みがたいほど強烈なものを蝶番として、ふたつの意味場が結合される。つまり、言語共同体の外にある力が、蝶番の働きをする喩によって、ことばの表現のなかに導入されてくる。そのとき、文学の喜びが生まれてくる、ということが言われているように思います。

共同体の外にある力を内部に導き入れてくる表現の様式をつくる。これが「まれびと」と呼ばれる構造であるとする、それを言語表現のなかで端的に実現するものは喩であり、そこから生まれてくるのが詩です。ですから、詩というのは、共同体のなかに所属していなかった、あるいはそこから排除された異質な力や自然に属する力を、喩の回路をとおして言語表現に導き入れることによって、言語共同体の安定をグラグラと揺り動かすことができる。また揺り動かすことによって、私たちのなかから、いつもは表面にあらわれてこない力を浮かび上がらせていく。それこそが文学の発生にかかわっています。

### 虹の蛇が意味するもの

虹は、日本にかぎらず世界全域で重要な意味をもってきたメタファーです。ことによると、詩的言語の発生も、この虹と多くの場面でかかわっていたことが考えられます。

さきほど、約七万年前の旧石器時代の遺跡から、巨大な蛇をかたどった石像が発見されましたと言いました。この蛇がどのようなもので、どのような祭祀がおこなわれていたのかについて、くわしいことはまだわかりませんが、だいたいの推測はできます。地球上の文化のなかでもっとも古いタイプの文化を残していると思われるオーストラリア先住民・アボリ

ジニの伝承のなかには、レインボー・サーパント、虹の蛇が登場します。アボリジニは、アフリカを九、十萬年前にでた人々が、三、四萬年かかってインドネシアからニューギニアの突端部にたどり着き、五、六萬年前に、海を越えてオーストラリア大陸に渡っていった人々の子孫であると言われています。その文化、とりわけ宗教と神話の領域では、旧石器型の文化の特徴が残されています。

彼らの考えでは、「ドリームタイム」と呼ばれるものが世界の根源にあります。ドリームタイムのなかでは死者と生者が一体となっていて、未来に誕生する生命の種も、そのなかにいます。人間が夜見る夢は、このドリームタイムのかすかなあらわれだと考えられていますし、現実の世界のそこにもドリームタイムがあつて、精霊たちが人間に視線を送り続けています。アボリジニの聖地は、たいてい水溜まりですが、その水溜まりの底にはレインボー・サーパント、虹の蛇が隠れています。雨季のはじまりの時期には、このレインボー・サーパントが天にまで届くほどの鎌首をもち上げて出現すると考えられていました。これは人類のもっとも古い宗教的思考のひとつです。私たちの世界ではいろいろなものが分離されていますが、ドリームタイムのなかでは、すべてが一体となっています。人間と動物は話ができますし、人間同士のコミュニケーションも言葉を使う必要はないのです。

離れ離れの間同士が、この現世において、深いレヴェルで結ばれるには、性愛、エロスが回路になります。昼間の世界では、言葉を交わすことでしか、お互いの心を通わすことができませんが、社会の監視の目がおさまる時間、つまり人間が夢を見る時間、夜の暗闇のなかでは、肉体と肉体を接触させることによってつながり合う。もちろんそれがドリームタイムそのものではありませんが、ドリームタイムがもっている機能、つまり離れているものを一体に結びつけてしまう強力な力、虹の力の破片のようなものが、人間の性愛のなかには実現されている。

さきほどの東歌で詠われているのはそういうことですね。つまり虹は真っ昼間から天空で性行為を行っているという考

え方が古代人のなかにはありません。人間の共同体の外部にある強烈な力が人間のなかにわき上がってくる回路があって、それを外の世界のイメージとして投射すると、水のなかから立ち上がってくる巨大な虹の蛇の姿になる。この東歌をとおして折口信夫がなにを言おうとしているのかよくわかります。喩の機能として、ふたつの意味場がポキッと折られて、そのふたつの場を虹という蝶番が結んでいます。この喩としての虹こそが、私たちの人間世界にエネルギーを放出してくる回路になっています。虹が「まれびと」と同じ構造をもっているというのは、そういうことです。

虹のメタファーとしての機能は、古代中国の祭祀にかかわる歌謡のなかにも見いだされます。「詩経」のなかからひとつを選んでみましょう。

三 維鵜在梁 梁にゐながら魚とらぬ

不濡其味 鵜はくちばしも濡らさずに

彼其之子 ぬしは

不遂其媾 逢うても下さらぬ (「媾」は情交)

四 蒼兮蔚兮 思ひがませばあの山に

南山朝隰 朝から虹が立ちのぼる

婉兮變兮 可愛いや

季女斯飢 乙女のやるせなさ

これもとてもエロチックな詩です。「鵜はくちばしも濡らさずに」というのは、露骨に性的な意味ですね。思いがつのれば、あの山に虹が立つというのは、少女のなかに立ち上っている虹のことでしょう。この詩のなかでも、虹が性愛の重要なメタファーとなっています。

折口信夫の考え方をもう一度繰り返してみますと、文学というのは共同体の内部からは出てこない。共同体の外側に排除しておかなければならなかった異質な力、過剰な力を、なんらかの回路を使って共同体のなかにもち込み、共同体を揺り動かし変化させることが必要で、それが私たちに文学の喜びをもたらすというのが折口信夫の考え方で、それは宗教の形で表現されると、「まれびと」の形をとるようになります。そして詩の言語では、それは喩の形をとり、喩の代表的なものとして虹を考えることができる。あるいは虹の類似物を考えることができる。

その虹は私たちの世界の外にあって、私たちの世界を根底から支えています。生命の根源はこの力にあり、私たちの生命は、虹の蛇に支えられているのでなければ生き生きと生きつづけることができません。水底に眠っている虹の蛇を、喩という回路を通じて、あるいは宗教の構造を使って、私たちの世界に引き上げることができなければ、共同体の言語の掟だけでは、私たちの世界は干からびてしまうでしょう。しかし、私たちの世界には「まれびと」がいて蛇もいる。そして文学表現が存在しています。文学は私たちの世界を生き生きとさせるものですが、それは虹の蛇と共にあるということです。

水溜まりの奥にある虹の蛇の場所というのは、私たちの世界の生命の根源であると同時に、富の根源でもあります。私たちの世界を豊かに、たくさんの動物や植物を生かしてくれるのもこの虹の蛇です。オーストラリア先住民が考えるように、雨季のはじめに、虹の蛇が天空に立ちのぼって雨が降ると、地上に無数の動植物が発生する。それが旧石器時代の人々にとっての富でした。

新石器時代になると農耕がはじまりますが、農耕を守ってくれる神が、この虹の蛇であると考えられました。水源地に眠っている蛇あるいは龍は、豊かな水をもたらし、農耕の守護神となります。やはり私たちの世界の富の根源を司っている神です。

日本列島では、この水源地にいる蛇神や龍神が、大きな働きをしてきました。水源地には多くの場合、仏教のお寺が建てられています。たいてい最初は小さなお堂で、そこに観音像が置かれたことから出発しています。この観音像の多くは、十一面観音です。十一面観音は頭にたくさんの顔をつけていますが、これは人類学的にみれば、蛇の象徴と考えられます。大地の生命力を、多頭の蛇として表現する神話はたくさんあります。日本で奈良時代につくられたお寺は、水源地に十一面観音などの観音像をお祀りしたことに起源をもつお寺であるケースがほとんどです。

その水源地とはなにかというと、蛇が隠れている場所、つまり富の根源地であるということになりますね。そしてこれが文学における比喩の発生につながっています。

### 文学と資本主義

さて次に、中世の民間伝承にあらわれた虹についての考え方を見てみましょう。

昔昔。

昔ア、虹のかがった時、其の虹の橋の下さ行って見ると、銭降ってるならけど。ほんで、みんな、わらわらど吠な腰籠なの持って、虹の立ってる内、銭拾い行ぐげド。

ほんで、このままでア、人々アだんだんとへヤミコギ（怠け者）えなって大変事らどて、天の神様ア考えで、人アなんぼ

虹<sup>ぼ</sup>は追<sup>か</sup>っかけてでも追<sup>か</sup>っつかね様<sup>よ</sup>えして呉<sup>け</sup>ったけドワ。

ドンピン、サンスケ。(佐藤亀蔵)

(佐藤義則編『全国昔話資料集成』)

昔、虹がかかったとき、虹の立った場所に銭が降ってきたので、みんなで籠をもって拾いに行った。このままでは人々が怠け者になって大変だということで、天の神様の考えで、いくら虹を追っかけて行っても、虹の根元にたどりつけないようにしてくれた、というお話です。

ここには、虹が立つその足元は、富の根源である、という考えが表現されています。この昔話の原型ができた中世から近世にかけて、おそらく室町時代ぐらいでしょうが、その頃には、富というものが貨幣の形をとるようになってきます。ここでも虹が富の比喻になっているのですが、古代においては、性愛が富の根源であったのが、貨幣経済が発達してきた日本においては、お金に変わってきたということが言われています。

お金というのは、単なる交換のための道具ではなかったということです。それはレインボー・サーパント、虹の蛇が隠れている水底から、私たちの世界に向かって投げ上げられてくる富の形だったということです。虹の蛇が富の原型であるエネルギーを私たちの世界に向かって投げけると、お金に変形してパラパラパラと私たちの世界に降ってくる。外の世界から境界面をとって、パラパラと私たちの世界に向かって投げられてくるものです。

節分に豆をまく風習があります。いまでは節分の豆は、人間の世界から闇のほうへ向かって、「鬼は外、福は内」といながら投げていますが、もともとの古い形はそうでなかったようです。冬から春への境目となる節分に、人々が物忌みに籠もっていると、屋根に向かってパラパラとなにかを撒く音がする。それは本来、境界面から私たちの世界に向かって

撒かれるもので、今では逆に人間の世界から外側に向かって撒いています。節分の豆は、鬼が出現したことをあらわす信号として私たちの世界に撒いているのだらうと思われませんが、鬼というのは人間の世界の外にいる精霊を指していますから、「鬼は外」と言い方は、けしからんということになります。来年からはぜひ家のなかに向かって撒くとよろしいと思います。

余談になりますが、学生時代に叔父の網野善彦さんと話していたときに、こんなことがありました。網野さんは、非人の研究をされていましたが、その頃、検非違使から岡っ引にいたる警察機構の研究をしていました。銭形平次はお金を投げますが、「きみ、あのお金はなんだと思う？ あれこそがまさにお金を他界からこっちの世界に向かって投げ込んでく、鬼の化身の行為、表現ではないか」と興奮して話していました。

網野さんはいへんに詩的な思考が得意な方でした。銭形平次の話はちょっと面白くなりすぎるので、今日は深入りしないでおこうと思います。しかし、虹が立つ場所、つまり水源地に行くと、そこから吹き出てきた虹の力がお金に姿を変えて降ってくるということが、この時代にもあったということです。お金というものはなんなのか、実によくわかりますね。つまり共同体の外から私たちの世界に向かって投げ入れられてくるものということ。反対に、私たちの世界のなかから外へ向かって投げ出すものの代表はなにかというと、それは排泄物ですね。お金と排泄物はしばしば象徴的に同じものとして考えられています。

次に挙げるのは、わが国の資本主義の発生、市の発生についての話です。

一 寛治六年（一〇九二）の六月七日に、堀川院殿上の小庭ならびに南池の東の頭にそれはそれはみごとな虹が立った。そのとき、陰陽頭賀茂成平が召されて、「世間の習、虹見ゆる処、市を立つ」というが、その根拠はいったいなにもとづ



くのかという答申が求められた。そして、その答申は、先例としておこなわれてはいるけれども、「諸道勘文みな虹見ゆる 処に市を立つるの文無し、これただ俗語」というものであった。

(藤原宗忠『中右記』)

このように民間では、虹の立つところがあつたら、そこに市を立てるべきだと考えられていたということですね。これは平安末期の話ですが、日本の資本主義はすでにこの頃から稼働をはじめていたようです。日本列島で貨幣経済が発達し、農村部にまで及ぶようになったのは鎌倉から室町時代だと言われていますが、しかしその原型はここにありますし、さきほどの昔話を見てもわかるように、貨幣というものを知った庶民大衆は、すでにそこに資本主義の原型というものを見えています。

資本主義はいわば虹の蛇、共同体の外にある自然の力を貨幣に姿を変えて私たちの世界にもち込み、その貨幣を市で流通させることによって私たちの社会を活性化させる働きをもっているのです。つまり文芸と経済の資本主義というのは、本質を一にしているということができます。そして日本で資本主義を生み出し、発達させた人々というのは、境界面に生きていた人々です。普通の人々より強烈な力、虹の力、エネルギーを全身に浴びていましたから、自然のエネルギーを全身に浴びていることを表現するために、背中には俱利伽羅紋紋の刺青までしている人もいたということでしょう。

### 西鶴がとらえた貨幣経済

近世において開花した文芸作品に、井原西鶴の『日本永代蔵』があります。その第一話を見てみましょう。

それ、世の中に、借銀の利足程、おそろしき物はなし。此御寺にて、万人、かり銭する事あり。當年、壹錢あづかりて、

來年、弍錢にして返し。百文請取、弍百文にて相濟しぬ。是、觀音の錢なれば。いづれも失墜なく、返納したてまつる。

(井原西鶴『日本永代蔵』)

「此御寺」というのは、大阪府貝塚市にある水間寺のことです。名前の通り、ふたつの川が合流する場所にあり、ご本尊の聖觀音は、水間觀音と呼ばれて親しまれています。この寺では、奈良の長谷寺などと同じように、金融業をおこなって来ました。ちなみに長谷寺は、三輪山の背後にある大和川の水源の洞窟に十一面觀音をお祀りしたことから発達したお寺です。こうしたお寺では、庶民救済のために貸し錢、つまり金融業をおこなって来ました。水間寺では、翌年に倍返し、つまり一錢借りると翌年には二錢にしてお寺に返すというのが習いでした。觀音様が貸してくれたお金ですから、誰も踏み倒すことができなかったんですね。お金を借りた人は必ず倍にして返していた。そうやって増えていったお金で、水間寺はたいへん立派なお寺になっていったわけです。

さてこの『日本永代蔵』の有名な話ですが、江戸で回漕業(船をつかった運送業)を営む男が、水間寺にやってきて、一貫を貸してくれと言いました。一貫といえたいへんな金額ですが、お坊さんたちはその男にお金を貸してあげました。けれどもその後、お坊さんたちは心配になってくるんですね。あんな大金を貸したら、ぜったいに返ってこないんじゃないかと。一方、この男は江戸に戻ってきて、觀音様の利生の錢であると言って漁師たちに又貸しをはじめました。そうしますと、これがまた倍になって返ってきますから、たちまちにして大金持ちになっていきました。そして十三年後、八九一二貫に増えたお金を、この男はそっくり水間寺に返したんですね。何頭もの馬の背に乗せて運んでいる絵が描かれています。水間寺ではこのお金で宝塔を建てたとあります。

このように『日本永代蔵』の最初に書かれている話というのが、まさに水の神様とかかわりがあるのです。これは古代

の信仰形態でいうと虹の蛇であり、虹の立つ場所、水源地には蛇の神がいて、やがて時代が下ってくると、観音様に姿を変えたということです。虹の立つ場所は、市の立つ場所です。市というのは、お金と商品を交換しながら、商人が多少の利得を増やしてゆく商取引がおこなわれる場所ですが、これを純化していくと金融になります。つまり商品の交換をおこなわないで、お金だけを交換していくわけですね。倍の利息というのは、今の金融業者でもなかなかない高利ですが、観音様ですから許されるわけです。この観音様の高利貸のお話にはじまって、『日本永代蔵』では、貨幣経済が発展していく世界のダイナミズムや喜びというものを肯定する文章が次々と書かれています。

『万葉集』の頃には、虹は、性愛という、言葉に表現することもできない、ましてや数で数えたりなどできないエネルギーを象徴するものでしたが、近世に近づくにつれ、数値に換算できるお金に変わってきました。地下の世界からわき上がってくる力が、境界面に触れて、私たちの世界にパラパラと貨幣となって降り注いでくるとき、目に見えない虹の力は数字に変換されていきます。そして商業経済と資本主義が発達するようになります。井原西鶴という人は面白いことに、数字にとりつかれていました。一晚にたくさんのお金を矢継ぎ早に一気に詠み上げてみせましたが、自分が詠み上げる俳句の数に執着していましたし、『日本永代蔵』のなかでも数字がたくさん出てきます。ここで数字が、文学の主題として大きく登場してきました。

私たちはこれをたんに合理的な経済が発達することによって、新しい町人文学が生まれた、というような解釈で済ませてしまうのではなく、なぜ数字なのか、ということにまで踏み込んでいかなければなりません。エネルギーが数字に変わるといことが、近世社会が成立するための条件をつくっています。近代社会がどうやって自分の基礎をつくったかという、力を数に変えるシステムを開発したからです。これによって技術と科学が可能になりました。水源地から立ち上がった虹がパラパラパラと数字に変換可能な銭になって降ってくる、ここに人間の意識の大きな変化が見られま

す。

と同時に、そこには旧石器時代から一貫して流れる思考の形があります。それは、私たちの世界の外にある力を、いかにして私たちの社会に導入してくるか、という主題です。その主題によって、最初の表現形態として、宗教と文芸が生まれました。力を数字に変換するシステムの完成と同時に、経済という新しいジャンルを確立しました。そして井原西鶴は、文芸と経済を結合していきます。なぜ彼はこれをおこなわなければならなかったのか。それは井原西鶴が、大阪に展開していた当時の資本主義の根底に、古い文芸を成立させていた思考のダイナミズムと同型の運動を見いだしていたからだと思えます。ですから西鶴は、近世文学の祖であると同時に、文芸の発生の根源につながる想像力をもっていた人だったと言えましょう。

国文学の研究は、人類学だけではなく、経済学や象徴をめぐる学問の根源につながっているということを明らかにすることができるといふことです。折口信夫の国文学の発生の理論から、私たちが学び、発展させていくことはまだまだたくさんあるでしょう。詩的言語と資本主義というのは、深いつながりがあります。折口信夫はよく「それなのに、どうして詩人は貧乏なんだろうか」という疑問を弟子たちに投げかけていたと言いますが、じつはこの問いは、私たちが生きていくこの近代社会の本質にかかわっています。